

統

一



第七百七十六號

宗教的意識に就て
 日蓮上人の國家觀
 清泉一滴
 宗教選擇に就て
 聖祖鑽仰の資料に題す
 雜纂
 報道廣告等

本多 日生
 小笠原長生
 中原通應
 石川顯隆
 高田日暢

宗教的意識に就て

本多 日生 師 口述
 石川 顯 隆 筆記

(1) 法華經の聖訓

若有三受二持、讀誦、正憶念、修習、書寫、是、法華經者、
 當知、是人、則見、釋迦牟尼佛、如從佛、口聞、此、
 經典、當知、是人、供養、釋迦牟尼佛、當知、是人、
 佛讚善哉、當知、是人、爲三釋迦牟尼佛、手摩、其、
 頭、當知、是人、爲三釋迦牟尼佛、衣之所覆、(普賢善
 薩勸發品)

(2) 宗教意識と教義

本日は宗教的意識に就てと云ふ題にて御話する考へて
 ありませす、之の題を出した考へは佛敎は寔に高尚な尊
 い敎へてあるが之を信する信者の意識を考へて見ると
 甚だ低い人が多い様に思はれます、殊に法華宗の信者
 などは法華經が諸經中王最爲第一であるとか佛陀の隨
 自意の敎へてあるとか云ふ事は皆よく知つて居るがさ

て各自の宗教的意識は如何であるかと考へて見ると實
 に低い者が多い、經典が如何に立派なものであるを
 奉獻する處の弟子なり信者なりの心に其の尊い敎へが
 こなれて働らんければ實際何のやくにも立たない、
 則ち死せる宗教であります、故に法華經を信するなら
 ば法華經の尊い點を味識してこれに同化して行かなけ
 ればならん

(3) 教義と信仰との矛盾

然るに中古より信仰と云ふ事は何の譯もなく只盲目的
 に信すればよいと云ふ事に思ひ自己の意識など少しも
 考へない様になつて居るのはなさない事であるそう
 して自分は立派な佛敎の信者であると思つて居る甚だ
 間違つた考へであります、親鸞上人の言葉に面白い事が
 ある、外儀は佛法に似たれども内心外道を歸敬せり、
 と云はれてある、外面の状態を見ると如何にも立派な
 佛法信者の様でも内心は外道波羅門の心得と同じであ
 ると云はれたので是れは確かに一の格言である、日蓮
 上人の御言葉に斯かる意味の事は甚だ多い、顯謗法抄

の中に「宗教を得て權教の義に順ぜしむ」又「信ずと雖も然も信ぜざるものなり」と示されて居る。日蓮宗の人々は此の上人の聖訓に注意せんければならん、自分では立派な日蓮宗の信者であると思つて居ても實際の心得が上人の教へに契つて居なければ決して日蓮宗の信者ではありませぬ、我が顯本法華宗の開祖日什上人が「受持分絶」と云ふ事を非常にやかましく仰せられた受持とは信念の事である今日の言葉で云へば宗教意識の事でありませぬ、當時の日蓮宗の人々はその心を調べて見るに大低は信念が絶へて居た受持分絶して居た其の信仰の正しい點がなくなつて居たと云ふ事を盛んに仰せられたのであります、現今の信者の状態を見るに正しい信仰意識を持つて居る人々は實に少ないと思ふ、これは極端な云ひ方の様だが仔細に觀察して見れば正しく法華の信仰になつて居らぬ、殆んど天理教や蓮門教の信者と同じ様な迷信に陥いつて居る者が甚だ多い、それ故に一方に經典批判をして正しい教へに據ると云ふ事が尊いと共にしりぞひて自分の信仰意識は如

自覺してこゝに生死を超越して限りなき法悦の心地に住する事を得るのであります、我等は決してこの崇高にして偉大なる信仰意識を逸却してはなりません

(5) 信仰意識の墮落

然るに日蓮宗の多くの信者はこゝに留意して居ない、これ信仰意識の劣なる所以であります、上人の「信ずと雖も然も信ぜざる者」と仰せられた部類の者である、加之甚しきに至つてキツネヤタヌキの様な動物の前に至つて自我得佛來とやつて居る實に言語に絶した有様である、苟くも佛教信者と云はるゝものが六道以下の天部などを以て信仰の對象とすべきものでない、況んや、諸經中王最爲第一たる法華經の信心が決して左様な粗末なものであつては實に慥はしいことである

(6) 日蓮上人の信仰

前にも屢々云つた様に法華經の信心とは無始實在の釋迦牟尼佛の御前に法華經を讀誦するのであると云ふ心持を持つて信仰を捧ぐるのである、上人はこの點を解

何と云ふ事を考ふるのが最も大切な事でありませぬ、上人の御言葉に「日蓮が弟子檀那なりと云ふとも信心よわく候はゞ云云」とある、たとへ闍魔法王の前に行つて自分で日蓮の弟子檀那と云つても證據がなければだめである、「日蓮が判を持たざらんものはよも御用ひは候はじ」と仰せられた意味をよく注意せんければなりません

(4) 法華經の信仰意識

そこで只今拜讀した御經文の意味合ひは我等が信仰意識に就て最も尊い點であります、法華經を信じ持つ者は單に御經を尊崇し大切にすることのみならず其の御經の文字を通して直ちに活ける本佛の實在し給ふ事信するるのである、この天地法界の本主たる無始常住の佛陀が法華經信者の無限の信仰の對象であります、若し我等が至誠法華經を受持し讀誦するならばそこに本佛釋尊が慈愛深き御手を持つて我等をなで給ひ又柔順なる御衣の裏に我等を護念し玉ふ事宛も父母が幼兒を愛護する如くなし玉ふのである、我等はこの御佛の加護を

釋して他の經を信する者の前には釋迦佛入滅し玉ふと雖も此の經を信する者の前には實在し玉ふと仰せられてあります、上人は龍ノ口ヤ佐渡に於て殆んど堪え忍ぶことの出来ない様な迫害に御あひになつても常に活ける佛陀が衣を持つて覆ひ玉ふと云ふ者を御持ちになつて居たのである、上人が法華抄に「又法華經の行者をば衣を持つて覆はせ玉ふと申すもねんころなる義なり」と仰せられましたがこれはこの經文を信する時佛陀はねんころに我は汝の味方であると仰せられた語である、この語に依つて上人は無限の歡喜法界に住して居られたのである、此の法悦に依つて上人は佐渡等に於けるあらゆる大難を忍び玉ふたのであります、上人の信徒は此の點をよく考へなければならん、「衣を持つて覆はせ玉ふ」とは實に宗教意識の最上なるものである、斯かる圓滿なる意識は他に決して類例がないと思ひます

(7) 宗教意識と文明

全体人類に最も尊い宗教的意識と云ふものは如何なる

所より發現するかと云ふに一は人類固有の性情則ち先天的の心より發するものである。又一つは人類最高の希望より現はるゝものであります。故に文明の度合が低ければ低い意識が現はれ高ければ高い立派な意識が發現する譯である。宗教は一面願望の投影であります。故に其人の人格如何或は國家の文明の度合如何と云ふ事は其の人や其の國民の宗教心に注意すれば直ちに判然する譯であります。個人として如何に立派な人格を有して居ると云つても其の人が只形の上に金が欲しいとか病氣の平癒とか云ふことのみを願望として居るならば其だ人格の度合の低い人と云はなければならん。國家の文明の度合も之と同じて如何に立派な文明國であると云つても其の國の宗教が正直に證明して居るから致し方がありません。我國の如きは軍事は申すに及ばず、外交でも教育でも殆んど完備して歐米の文明國に肩を并べた積りて居りますが國民の宗教心の度合を見ると實になさけない次第であります。殊に東京附近の人々の宗教心は一層微渺しいのであります。立派な

のである、たとへ自分の家庭に苦痛がなくとも親戚とか友人の間とか又社會とかどこかに苦痛があつて中々煩さいものである、丁度夜は蚊が飛んで來る晝は蠅がたかると云ふ様な有様なもので人はとても人生の煩惱より離るゝことは出來ない、これ人類が宗教を欲求して來る一の原因である

(10) 束縛に對する解脱

モー一つは人生には種々なる束縛があつて人生は中々自由にならない精神上にも身体上にも非常に不自由が多いのである、古來より法律上の束縛を脱しやうとして世界に多くの戦争が起つて居るが吾人類が束縛されて居ることは只に法律上ばかりでない實に種々なる點に於て不自由なるものである、宗教はこれらの束縛を脱して大なる自由を與へるものであります

(11) 死に對する覺悟

モー一つは死と云ふ事である死は實に一舉にして萬望を葬り去るもので人生悲惨の極であります、實に人生に死ほどいやなものはない死にたくないと云ふことは

八字髻をはやして洋服を着て天晴れ一門の紳士と思はれる人々や如何なる人の令夫人であるかと思はる、様な人々が恥かしいとも思はず陸續として池上の長榮稻荷や穴守や成田の不動へ參詣するに至つては實に何も云ひ様がない、これで文明も教育もあつたものではない寔に慨嘆に堪へざる次第であります

(8) 罪惡に對する懺悔

元來宗教の起つて來るのは人々に罪惡の伏在すると云ふことを感して悪いことから逃れて功德を積ふと云ふ反省の心の起るとき宗教は起る、己れが他人に對して非常な惡をはたらきそのことに氣づいて其人にあやまらうとしても其人は最早死んで居ないと云ふ様な時などは非常にすまないと云ふ後悔の念が起つて自然に宗教を求めて來るものである

(9) 煩悶に對する平和

又人々は如何なる階級に居ても種々なる苦惱が纏綿して居て之を脱るゝ事は到底出來ないそこで宗教に依つて其の苦惱多き人生を脱して樂しみを享けやうとする百人は百人千人は千人皆發する歎聲である然るに宗教はこの死を超越して不死の妙境界に到達せしむるものである、消極的にも死はいやだが積極的にも死はいやである、之を離るゝ爲に宗教は人生に起るのであります

(21) 自然力に對する感情

モー一つはこの宇宙間に不可抗の力の存在することであり、一朝氣候が變化すれば非常な風雨が起る隨つて萬人を戰慄せしむる様な波か起る山嶽が鳴動する爆發する大地震が起るそれは非常な悲惨なものである人類がこれ等の偉大なる不可抗の力に打るゝ時宗教に走らずには居られん、人々は平和な時には何とも思はぬが大坂なら大坂が大火の爲に殆んど焼さらはわれんとする有様を目撃するならこの自然力の偉大なることを認めてそこに宗教を欲求し之に依つてこの力と順應して向上せんとする心持が起るものであります

(13) 宗教心の満足

以上五つ擧げたが之は小わけにするから五つであるが

實は一つであるハルトマンが云つて居る世の中の總てのものは絶對に向つて居るのである一點缺けぬなき玲瓏玉の如きものに向つて進まんとして居るのである、これが人類の固有性である、之を圓滿に教を導びくのが宗教である故に宗教を知らないもの宗教を信ぜざるものは實にこしぬけてあると云つて居るが、佛陀の教に依つて見ても無論である、佛陀が解脱と仰せらるゝのは上の五箇の厭ふべきものを離れて五箇の希望を満たせるに外ならん、實に圓滿な教であります、小乗の四諦説に就て見ても道に叶ふ事を修すれば寂滅爲樂の境界に達するのである、善い事をして善い處に行くと云ふのは佛教一貫しての教である故にこの小乗の意義を推究すればそこに法華經の信仰實義も存するのである、法華經に結了聲聞法是諸經之王と説れたるはこれである、故に佛教は統一眼より見ればそこにましまりがついて居る

(14) 宗教固有の傾向

ハルトマンの始めより終りまで貫いて居るものは單一

ければならん事になる

(15) 佛教の緊急問題

佛教に於ては法身と云ふものを立てるそれに就ては無形の法身の一を取るか、形を有するものなれば散漫たるバラ／＼なものを取るかと云ふ事になつて居る、即ち多神的を滅ぼして一向ふか然らずして今日は阿彌陀明日は藥師として分裂的に安んずるかと云ふ事が佛教徒の決定を要する緊急問題である、法身の形もないものに向つて行けば信仰が立たず、あたゝかき信仰を起さんとすれば分裂を來す、佛教徒はどちらを取るかと肝要な問題である

(16) 國民と宗教

元來宗教が民族的の宗教で信仰が劣等であれば信仰對象が分裂的である、日本の多數人の信仰は分裂的であつてこれは日本民族が劣等であると云ふ事を天下に表白して居るのである、何故ならば日本民族は億兆心を一にすと云はれた如く政治上道徳上では統一されて居る、然るに宗教上では多神分裂の心を以て居ると云ふ

神教である、如何なる淺い宗教でも多神の狀態の宗教でもそこに何か一つの中心がある、則ち宗教心は一の絶對に向つて居るのは争ふ可らざるものである、非常な劣等な宗教で山を拜し木を拜する様な宗教でも單に山を拜するのではない又木を拜するにも單に木でない其の奥に何かの考へがある即ち絶對の考へである、穴守のキツネでも單にキツネではない、其の奥に何かある、佛教中の觀音様や不動様にも絶對の考へがついて居る、觀音は三十三身を現するから佛様よりまらひと思ふ、故に多神教でも一絶對に向つて居る宗教は吾々を亡びない絶對の處へ引上るのである、故に佛を無上正覺、智慧圓滿、自覺々他、覺行圓滿と稱するのである、キリスト教でも神を全智全能と云ふ、又淨土教で阿彌陀様を取つたが之も初めは佛の優劣から來つたのではない、修行の優劣から起つたが後には絶對を云はんとして阿字は十方三世佛、彌字は八萬諸聖教と云ふ様になつて來る、兎に角そう云ふ傾向を示して居るのは顯らからである、多神的のものでも何か唯一のものがな

ことはこの位不調和の人類はないのである、然るに宗教上絶對の統一神が顯はれたのが法華經である、日蓮上人の主義である、故に日本國民はこの立派な宗教に歸着せなければならぬ、一國民の宗教心が多神の狀態で満足して居るならば如何に其の國が文明だと云ふて居ても文明の度合の甚だしい事を證明して居る、又個人に就て云へば高尚なる精神上の考が亡びて物質的に下落して居る事を證明して居るのである、佛教は決してきれ／＼な語録の様なものでもなく、又唯だ有がたひ／＼と云ふ感情的のものでもない、こゝをよく注意せなければならぬ、我國の如き一方に文明が進んで行くにも拘はらず迷信が甚しひ、日本の宗教狀態は實に墮落したものである、禪宗などが非常に高尚な様な事を云つて居ても實際は種々のつまらん物を祭つて居る、眞言でもそゝである、これは多神を許す結果から來るのである、甚しさに至つては男根女根を祭る様になる、日本も到る處でやつて居る神事祭禮を見れば分かる、其の最も神聖にせんければならぬ祭禮の晩に亂醉

して亂暴を働らくこれが野蠻の状態を顯現して居る斯の如き状態に眞に國家の体面を汚すものである、この弊害は散漫たる多神を許すより來るのてある

17) 宗教の二大要義

元來宗教には二つの重大なる教義が顯はれて居る、一は我身に持つて居る佛性で、儒教で云ふならば本然の明德である、之を充分認めて置かなければならん、吾人にこの尊い佛性のある事を深く考へて日々反省して行かんければならん、世の中に若しこの佛性と云ふ事を信する事の出來ない人は己れの祖先に立派な人があつたと云ふ事を思ふてもその人は幾分か改めて行く事が出来る、人は何かこちらに信するものを認めなければ向上して行く事は出來ない、それ故佛教に於ては古來より佛性の有無が大問題でありえず、モー一つは完全なる客體である、絶對の佛陀の責任を信することでありえず、之と下手に解釋すると吾人の佛性の方面のみを説いて客觀の佛陀の方面を説かない、禪宗の如きは確かにこの傾きがある、又淨土眞宗やキリスト教は

ら、事實を擧げて證明して居る、上人の御言葉をかきて云へば「涅槃經四十卷の現證は此の品にあり」と云つて提婆龍女の成佛を事實に示して居る、又客觀の佛陀に就て云へば佛敎のあらゆる佛陀を擧てそれに統一の中心を示して居る、則ち十方法界の諸佛を分身として呼び寄せこれ等の一切の諸佛は皆我が一身の働きてあると示されて居る、「壽量品の佛の天月のしばらくかけを大小のうつはものに浮べ給ふ」と仰せらるゝ如く、三世十方の無量の諸佛は皆壽量品の本佛の影である、この本佛の無始實在を認めるのが法華經の最要教義である、キリスト教は單一神敎であるが佛敎は統一神敎である、この統一神敎と云ふ考へは世界の宗教中に其類がない、佛敎の各宗にもない、唯だ獨り法華經壽量品に説示された大教義にして眞に尊い宗教であります

19) 根本的の感應

こう客觀の佛陀と吾人の佛性とが完全に纏まつて來るとそこに感應の二字が肝要になつて來る、感とは吾人が天地法界に活ける佛陀の實在し給ふこと、自己の心

アマダ様や神様は立派に立つるが吾々の方を非常に下だす、吾人は唯だ罪惡の塊であると説く、これらはいづれも一方に偏した教で決して完全なものではありませぬ、そこでキリスト教の長所の神の觀念と佛敎の長所の佛性の考とをつぎ合せたものが將來の世界の大宗教であると考へて居る人々が甚だ多い様である、然し斯様なつぎ合せものを造らなくとも法華經は確かにこの兩面を完全に説明して居るのである、一面には佛性の可能を示して吾人に充分の價值を認めて居る、其の一例を擧れば常不輕菩薩の「我れ汝等を敬ふて輕慢せず、汝等皆當に作佛すべし」の如きこれである、法華經の思想は決して人類を輕しめない吾人には立派な光りある玉があるけれども煩惱の雲に覆はれて居る、それ故この雲を取り去らんければならんと云つて居る吾人の信する宗教はどしてもこの完全なる教義を示せる宗教でなければならん

18) 佛性の顯揚と統一神敎

法華經は單に佛性を具して居ると云ふ理論のみではな中に佛性の玉を有することゝを深く感するのである、應とは佛陀がこの至信の心に應じて救ひの手を下さることである、宗教の極致はこの感應の二字にあることを深く思はんければならんこの間の關係を自力とか他力とか云つて居るが皆な愚な考へてある、この感應の關係を根本より説き示せるが壽量品の本感應妙と云ふ尊い教義であります、世界の殆んど總ての宗教が吾人と佛陀若くは吾人と神との關係を説くが孰れも皆中間的であつてこの兩者を根本から説き盡して居らん、例へば日本の國体を説くには開闢の當初より説き來らんければならん、然るを若し途中より説き來るならば我が國体の眞に尊き所以を充分了解する事が出來ん、宗教もこれと同じて吾人と佛陀との關係が中間的では感應の妙味を眞に尊することは出來ない

20) 太子と王女の自覺

日蓮上人が本感應妙の尊い事を最も力を入れて御説きになつたのはこの故である、開目抄に「天尊の太子」と云ひ、本尊抄に「王女」と云ひ、法華取要抄に「我等衆

生は五百塵點切より已來教主釋尊の愛子なり」と仰せられた點に充分注意せんければならん、この佛陀と吾人との根本的關係を確信するは、如何なる迫害が來つても「佛け衣を以て懇ろに覆ひ給ふ」と云ふ心地に住する事が出来る、日蓮上人が伊東や瀧ノ口や佐渡大難を堪へ忍び給ひしは常にこの大信念に住し給ひし故であります、我等信者は常恒不斷にこの本佛釋尊の加護を信する、ことが最も肝要であるこれが宗教意識の最上の點であると思ふ、故に法華經を信する者は此の心を離れてはなりません。

21) 日蓮上人の聖訓

法華經の行者をば衣をもつて覆はせ給ふと申すもねん

ひろなるぎなり

(法衣抄ノ一節)

昔者佛祖法輪を轉ずる事四十餘年の後、靈鷲山にありて始めて降世の本懐たる法華經を説くや、迹化他方來の菩薩等、皆佛滅後に之れが宣傳を懇請す、佛祖「止みね善男子、汝等が此經を護持するを須ひず」と告げて之を止め、特に上行等の本化大菩薩を召し、三世十方の諸佛の前にて「我れ實に成佛してより無量無邊百千萬億那由阿僧祇劫也」と唯一本佛たる本身を開顯し、大神力を示し然る後一經の肝心たる妙法五字を上行菩薩に付托し末法に出現して衆生を濟度すべき命じ讃歎して曰く

如來の滅後に於て佛の所説の經の因縁及次第を知つて義に隨つて實の如く説かん、日月の光明の能く衆生の闇を滅し無量の菩薩をして畢竟して一乘に住せしめん (神力品)

と上行等の任務是の如く重大にして其現出と同時に、佛法の全權之れに委ねらるべきものたる事は苟も法華經を繕くものゝ直ちに了解する所ならん、夫れ一塵の飛び一草の生ずるも皆因縁なかる可からずとは佛教根

日蓮上人の國家觀

(京都天晴會第三回例會講演筆記)

子爵 小笠原 長生氏

近來日蓮聖人に對する研究の聲盛んなるに到りしは喜ぶべき現象也、今聽げながらに予の知り得たる聖人の國家觀を述べんとす、しかしながら、それに就て説をなすものあり、曰く人格日蓮としての忠君愛國は疑ふ可からざるも、神格日蓮としての觀念は或は超國家的にあらざるやと、一應然るが如しと雖も小生の見解を以てせば、人格と神格とを問はず、上人を以て經の忠君愛國者と認むるものにして、強て兩者の差別を云はゞ神格として忠君愛國は、人格としての夫れよりも一層深大なる意義を有すること、合點すべき也

抑も神格とは他よりの評言にして、上人自身よりせば即ち上行菩薩の再誕たる自覺に外ならず、從つて其國家觀を研究せんと欲せば先づ上人は如何に上行出現と我國家との關係を解釋せるかを觀察する事肝要也、

本の主張なるに、況してや末法唯一の大導師本化上行たる事を自覺せる日蓮聖人が其身日本國民と生れ居るを偶然と思惟するの理いかであるべき

經には「諸佛世尊は一大事因縁を以ての故に世に出現す」

と説かれしは、これ上行菩薩は本來法華經の意義を有する國家に出現し先づ之を聞き、示し、悟らしめ、終に其道に入らしむべきを指せるものにして必ずしも上行其者が法華經主義を持ち來りて、新たに移植せしものにあらずして詮する、境智冥合とも云ふべきなり

曾谷抄に、佛日西に入て遺耀將に東に及ばんとす此經典東北に緣あり……………予此記文を拜見して兩眼瀧の如く一身悦を徧くす……………天竺に於て東北に緣ありとは豈日本國にあらざるや……………

元來法華經主義とは積極的統一主義也、諸佛を統一し、十界を統一し、法門を統一し、一切經を統一し、而も其各々に確乎たる中心點を示せるにあらざるや、約言すれば唯一の中心を認めて萬法之れに歸趣し以て統

一を實現するにあり、されば上行の出現すべき國相は神聖不可侵の靈氣を有し、卷ては世界道義の中心となり、舒ては統一的に宇宙を靈化するに足るべきものならざる可らず、之れを是れ法華經有縁の國土とも云ふべけれ、嗚呼此不可侵の靈氣即ち相對の諸力を超絶したる大威力の實在は申すも惶惚けれど天成の神統を垂れて之を無窮に傳へ給へる大日本帝國の、御稜威ならて世界何處にか求め得べき、まことや宇内に國、建つるもの多しと雖も其の主權者はいづれも競争勝利の結果より成り相對の範圍を超脱する事能はずして根本既に神聖の意義を失ひ従つて其國民をすら絶對に歸せしめ得るの資格を具備せず如何にして世界靈化の中心となり得べきぞ、上人は、神國王御書にて

我が日本は一閩浮提の内月氏漢土にも勝れ八萬の國にも超へたる國ぞかし

と記して世界唯一の靈國たるを斷言し更に進んで

日本國は一向に法華經の國也 (教機時國抄)

讀したるは前陳一大事因縁の註釋と見るべく、更に

立てたり、横の三の字は天地人也(中畧)天地人を貫きて少しも傾かざるを王とは名づけたり、王に二あり一には小王也、二には大王也(中略)一切經は小王也譬へば日本國中の國王受領等の如し法華經は大王也天子の如し(中略)國々の民の身として天子の德を奪い取るは下剋上、背向上下、破上下亂等はなり設ひ、いかに世間を治めんと思ふ志ありとも國も亂れ人も亡びぬべし

と説き給ひしに徴するも、王法佛法の解釋明瞭ならずや

如上の觀念を抱きて當時の國狀を視たる上人は如何に佛陀豫言の照々たるに愕れしぞ、時は末法の始に當り日本は法華經有縁の國土たるに拘らず、今や悲むべき變相を呈し居れるが爲めに其身は自然に勸持品の二十行の偈を色讀するの迫害に遭ひ、靈國本有の靈光は暫く妖雲に鎖され横暴をたくましくせる執權北條氏が天の冥罰を免れ居るさへ奇怪至極なるに武人と云はず佛徒と云はず、誠心國を憂ひ決然起つて北條氏を責め

進んで

佛法必ず東土日本より出づべき也 (顯佛未來記) との大斷案を下すに至れり、是れ寔に佛祖が四十餘年未顯眞實と喝破せるに齊しき深の深、重の重なる一語にして依て以て正像二千年の間各國に傳はり蘭菊其美を競へる諸宗諸派を悉く否定し日本帝國の靈氣と融合一如したる法華經善量品文底の大意義開顯ならては衆生を救ひ國を救ひ世界を救ひ以て娑婆を寂光土たらしむる本佛大慈の本願は到底實現し能はずとの大々的主張にて經文所載の佛の所説の經の因縁及次第を知つて義に隨つて實の如く説くとは此活斷を指せるにてはあらざるか、三大秘法抄にては

王法佛法に冥し佛法王法に合し

と論ぜられしは此王法とは人爲的に區域を定めて一國を支配する如き權力を指せるにあらずして絶對の靈位より發する眞の世道を謂ひ、佛法も亦日本より出づべき唯一正法を指せるものにて、内房女抄に

王と申すは三の字を横にかきて一の字を堅てさきに

て以て固有の御國跡に還し申さんとするもの一人もなきは只事とも覺へず、畢竟是れ國民思想の指導者たる宗教其者が靈國に相應せざる權教たるが爲めならずとせんや

佛法漸く轉倒しければ世間又濁亂せり、佛法は體の如し世間は影のごとし體曲れば影なきめなり(難易抄) 法は必ず國を鑿みて弘むべし、彼の國に好かりし法なれば此の國にも好かるべしと思ふ可らず(南條抄)

上人の眼に映じたる當時の諸宗、解説を説くものあり他方淨土を教ゆるものあり、密教の利益を主張するものあり、小乘戒を勸むるものあり、然れども詮する所個人本位のみ厭世思想のみ、本末顛倒のみ、枝葉の道徳のみ、元より日本即寂光土たるの確信の下に僥非一心絶對忠節を天來の靈位に捧げ之を發展して世界を靈化し全人類を救済せんとする底の雄大剛健なる國民思想を養成し得べしとも思はれず、是に於て

日蓮は日本の魂 (星下抄)

なる大責任ある事を覺悟すると同時に

先づ國家を祈りて須らく佛法を立つべし(安國論)と決心し

我日本の柱とならん、我日本の眼目とならん我日本の大怨とならん (開目抄)

との誓願を立て堂々諸宗を折伏すると共に一大鐵槌を執權の頭上に下せり曰く

日本國に代始まりてより已に謀叛の者二十六人(乃至)第二十六人は義時なり (筒御器抄)

權の太夫は民をかし (種々振舞抄)

拜し來れば上人の面目爰に顯如として紙上に聲あるかと疑はるゝ也、洵や名こそ執權なれ六十餘州の實權を掌握して正に全盛期にある北條氏の權勢をものゝ數とも思はず「民をかし」の一言にて粉蓋し去り以て大義名分を正したるは眞に特筆すべき金言にあらずや、是れ若法華經妙解の絕對信念より發せる神格日蓮の言なることを忘るべからず、世の上人を誤解し若しくは嫌忌せるものは上人が蒙古襲來を警告するに當り彼れを

天[△]四[△]海[△]皆[△]歸[△]妙[△]法[△]を[△]其[△]の[△]用[△]と[△]せる[△]もの[△]にして、換言すれば日本は能化なり、世界は所化なり故に上人にして眞實日本の滅亡を豫想せりとせば是れ法華經の意義滅亡を是認するの道理と成り第一は佛陀の豫言も佛教も根本的に成立せざるなり、果然々々、愈々蒙古來襲せる際に於ける上人の叫聲を聞かれよ曰く

小蒙古の人大日本國に來る (小蒙古書)

大日本の大の一字最も注目すべきものにして物質上の計數を指せるものならざるは勿論、所謂グレートよりも摩訶よりも更に深き意義あるものにして強て申さば靈とも意譯すべきか、之れのみにも曾て放ち給ひし上人の激語は決して其の眞意にあらざることを明かならずや、尙示寂に先だつこと七日即ち弘安五年十月七日弟子檀那等に與へし最後に書にも

日蓮は日本の大難を拂ひ國を持つべき日本國の柱

なり(中略)日蓮は日本第一の法華經の行者也日蓮

が弟子檀那等の中に日蓮より後に來り給ひ候はゞ

梵天帝釋四天王閻魔法皇の御前にても日本第一の

大蒙古と稱し我を小國と云ひ北條氏の到底正法に歸依し能はざるを察するや絶に、日本の滅亡悲むべきも此事なくんば如何にして謗法受罰を證明し得んやとの意を述べたる等を捕へ來つて或は超國家なりと信し、或は國家を咒咀せる逆賊なりと罵るも是れ畢竟愛子を叱責し或は杖振り上ぐる嚴父の胸中泣くより辛き血涙を呑みつゝあるを察せざるに齊しからずや、日本の靈國たるは本體にして當時の状況は一時の變象のみ、猶ほ日月雲霧に隠るゝことありとも決して本有の光明を失はずして再び赫々たる光輝を示さずんば已まざるが如し、要するに上人の激語は國民を警醒して寸時も早く此妖雲を拂はん期したるのみ

毒量品にして本有の靈山と説かれたるは日本國なり、法華經の本國土妙たる娑婆世界なり、本門毒量品の未曾有の大曼荼羅建立の在處なり(御講開書)大曼荼羅とは世界のみならず實に十界悉く妙法に照され本有の尊形を示し居るの姿にして其の建立の在處なりと云へる上人の意は日本を以て法華經の體と認め一

法華經の行者日蓮房が弟子檀那なりと名乗つて通り給ふべし

世界の柱若くは世界第一の法華經の行者等と云はずして日本と云へるが最後の書なるを記憶せざるべからず而も是れ實に超國家的なるよりも百分倍深大なる法華經の意義を活現發揮せるにあらずや

且つ上人が宗旨建立に先だち伊勢大廟を參拜して神慮を伺し奉り入滅の時日像に化を帝都に敷き以て、正を天聽に奏聞すべきを遺命せる事注意すべきなり

以上開陳せる所を約言すれば、佛陀の豫言に基き上人が上行出現に關する觀念の要點は左の如きものか

一、上行菩薩は佛滅後二千年より同五百年迄の間に出現すべし

一、出現は一大事因縁を以てする事勿論也

一、唯一正法を説て其國本有の毒量品文底の意義を發展せしむべし、開示悟入の佛知見とは是也

一、然れども出現當時は其靈國變相を示し居りて非常の迫害を蒙るべし、勸持品二十行の偈等之に當る

一、但し如何なる迫害も遂に免かれ得べし、變化のものを遣はして衛護たらしむるが故に

一、上行の主張は佛陀の隨自意教にして難信難解なれば決して少年月にては思想を統一し難かるべきも早晚目的を達すべし、畢竟して一乘に住せしめんと

の畢竟の二字あるは是れが爲なり
一、結局は此の主義發展し世界はあろか十界一に歸して宇宙の解脱を實現し得べく此の主義を世法より觀れば大日本國の靈氣にして換言すれば眞の帝道と正法とは不二なるべし、故に上行は日本の柱として飽くまで本有の靈氣を擁護せざる可らず以上

(川崎生)

清泉の一滴

一時物質的に眩惑せる我が國民も、今や覺醒期となり、精神の靈光を得んとする趨向を現實せるは洵に悦ぶべき慶事なり本編は顯本の諸師がその要求に應じて、化導の實蹟を擧げんとするもの、素とこれ吾人がその一端を筆記したるもの、且つ諸師の校閱を經ず、時に或は名論卓説を害ふあらん、然れども吾人は多數の人に、この妙談を分與せんとするもの、その眞情に對し吾人魯鈍の罪を寛假せられなば幸甚 (中原通應)

佛とは何ぞや

山根日東師

近來國民一般の思想が靈的問題に意を傾け、之れに依つて慰藉を求めんとしつゝあるは、蓋し物質的文明の反動ならん此に於て苟も宗教家たらんもの此現代の要求に對し、慰安を與へ、向上せしめ、以て活動の意義

を明らかにせざるべからず

吾人佛教家は實に此大なる責任を双肩に負ひ、其任務を完ふするの自覺を有せざるべからず、然るに佛教が實社會に及ぼす影響の微々たる現狀を觀て、有爲の士如何にか慨歎せざるを得んや、惟ふに幽遠なる教理、廣博たる法門を有する佛教をして、統一せる證見なく唯一局部の理論的教法を解釋せんと力むる弊に依るものと云ふべし

此に於て吾人は分裂的宗派的佛教の偏網を脱し眞の佛教を認め社會に貢獻する所多からしめんとす、

凡そ佛教の何たるやを知らんと欲せば、須く教祖と經典の眞偽、隨自他、權實等を確めざるべからず、若し然らざれば終生研究に窮々たりと雖も遂に散漫に流れ佛教の眞意義を捕捉する、能はざるを猶砂に油を求むるの類也、日蓮聖人の「凡そ佛法を信するものは佛と經とを明むべき事」と示し給へるは實に能く此間の消息を盡して餘す所なし若し、此見解を以て佛教の何たるやを觀ば分裂的佛教の偏見を生ずるの恐れなかるべし

し此統一的識見なくば直にこの妙境に到ること能はざらん、即ち三千佛名經に其佛名を列判ぬると三千以て佛の數多きに驚かざるを得ず、經典には新舊兩譯の多數を擧げて五千七千餘巻と、以て其所説の廣博なるに眩ふべし、若し此多佛多經の中に於て何等一貫の説なくば釋尊程の大安語の者はなかるべし、彼一休和尚が「釋迦といふ大馬鹿ものが世に出て、衆の者を迷はせる哉」と喝破せるは此半面の趣きを云ひしものならんか、

然れども一代の所説は秩序整然として紊すべからず、統一的佛陀と其經典とは明かに顯説し給へり故に紛然雜然たる説は無二亦無三にして唯一乘を説かざるが爲の方便に過ぎざりし也、天台大師は、略ぼ佛教の統一を試みたるも尙未だ消極的に止り積極的に實現すると能はざりき、日蓮聖人に至りて佛陀の本懐を遺憾なく發揮し積極的宗教的統一を光顯し眞に佛教とは何ぞやの問題を明析に解決し給へり、其主張毫も偏見を交へず私意を混ぜず諸宗の妄信を破り、覺醒を促し、専ら佛

陀の本懐を鼓吹し、獸身の大弘法をなし給へり、即ち壽量品に顯はれたる久遠の本佛と法華經とを中心として起れたり彼の、弘法、法然、榮西、親鸞等の高僧、智は日月に等しく徳は四海に蔓ると雖も、尙佛法の眞偽に迷ひ權實を辨へざるか彼等の執する佛敎は其眞義を忘れたる本無今有の佛の敎にして殆んど空論に過ぎざれば佛自ら本門に至りて常住を開顯して諸經を打破し給へり日蓮聖人が撰法華經、本門段に至りて始めて南無久遠實成太恩教主釋迦牟尼佛と唱へられたるは則ち顯壽長遠の本佛也要するに佛敎とは久遠本佛の敎へにして其本懐とする所は法華經にありし也斯くて敎祖と敎典との統一を決し分裂の宗派の妄執を破り、世人の要求を滿たし人生の大意義を解せしめ未來の成佛を完ふせしむるものこれ眞の佛敎なり、迷ふ勿れ佛敎を信ぜんもの、忘るゝ勿れこの敎祖と敎典とを、然らば則ち心靈自覺の問題は教主の恩寵に浴して圓滿なる解決を與へられ金剛不壞の妙體を成ぜむと必せり、願くはこの妙境を信得せられんことを。

日蓮聖人の嚴訓

關田養叔師

日蓮上人の嚴訓一二を以て盡すべからずと雖も大別して二と見ることを得べし、即ち廣く世界人類に對する嚴訓と吾人信徒に對する嚴訓とこれ也、日蓮上人が己人の價值を自覺せよといへるは他の佛敎に多く云はざる所にして上人の特長とする所なり、人多く心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神は守らん」と只正直ならば不可なしとす、但し正直を標榜して果して衣食住の要求を満足せしめ、安心立命を得るや、蓋し然らず信仰の光明を認めて生活の意義を明ひべし即ち天災諸難に値ふや正直を以て慰藉者とするを得べからず、されど絶對的に正直を否定するものにあらざるは勿論なり、實に信仰は絶大圓滿なる佛陀を信認し如何なる大難災禍ありともこれと接觸するの大安心を有するが故に恐怖、悲哀、或は煩悶苦痛等をも醫すべく思ひべし、而して此信仰は一心欲見佛の大信心の上に始めて人類の價值を認むべし、此一心欲見佛とは精神的大自

覺にして眞の宗教的信仰なり、吾人が此大信仰を發したる時、絶大無限の、智慧圓滿の佛來り給ひて毎自作是念の悲願を起し、佛性を開發して完全なる妙體を成ぜしめ給ふ、此大自覺を有して茲に始めて人間の價值を論じ得らるゝものなり、若し此中心を失却し迷妄を脱せずんば假令總理大臣と雖も偉とするに足らず又「オサンドン」と雖も此大なる自覺を得ば賤むべからず但し直に以て亂用すると勿れ、日蓮上人が四條金吾に遣はして「心根もよかりけり」と鎌倉中の人々に呼ばれ給ひ」と讃せられしは實に此間の消息を餘蘊なく道ひつくし給ふものにして只自己の職務に忠實なるのみならず、法華經の御食にもよかりけりと歎め給ふ文なり、然り世界を支配する久遠本佛に敎はれたる信仰の力は遂に天地を動かすの用となり、本佛の慈悲と吾人の信仰と通ふ時大なる價值を表彰するものなり、日蓮上人が四條金吾を讚歎し給ふとは但に一個人のみならず一切衆生に對する嚴訓と見るべき也、國民一般に對する上人の嚴訓は安國論に「汝早く信仰

實乗の一善

笹川眞應師

立正安國論に曰く「汝早く信仰の寸心を改めて、遠に實乗の一善に歸せよ」と寸心とは精神也、實乗とは法華經也一善とは宗教道德の根源也、蓋し聖人の意は、早く信仰の精神を此法華經に轉じ、宗教道德の根本第一義たる此絶對善に基き活社會に光明を發揮せば理想國土を現實にせんと甚だ庶幾にあらん而して此正法に

依つて建てられたる救光の國土は時間を超越して滅する期なく空間を經して他に求むべからず、永遠の法悦的生活に住し、幾多の煩悶苦痛は猶水の火に値へるが如くなるべし、此に於てか自己の安全を得るのみならず一國擧つて理想的生活を現實になすを得ん、日蓮聖人の「然らば則ち三界は皆佛國也、佛國其れ衰へんや十方悉く實土也實土何ぞ壞れんや國に衰微なく土に破壊なくんば身は是れ安全心は是れ禪定ならん此詞此言信ずへし崇むべし」との次下の御文は實に是れ宗教的大教訓にあらずや

世の所謂倫理學者等、善惡是非を定むるに或は動機論を以てし或は結果論を以て確めんと力むると雖も眞に斷定する能はざるは何ぞや、蓋し其兩端に偏すを免れざれば也、此に於てか之れが調和を計り公明正大なる解決を要すべし、但し聖人の宗教的見地より之を見ればこの問題は明白に解決せらるべし即ち實乘の一善に歸せよと、此語見よりして或は個人的に、或は國家的に或は世界的に善惡正邪是非を定めば其間何等の反對

運聖人が法然の謗法を嚴禁したるや故ある也、佛教に所謂一業所感とは即ち是の謂歟

「實乘の一善に歸せよ」、然らば理想を現實にし宗教的自由、眞の幸福は求めずして得られん、久遠の本佛は此寂光の極に在して吾人を愛し給ひ、吾人は此本佛を敬慕して措く能はず、一切の人類は此光明ある法悦的生活を營み、自受法樂の靈用を實にすべし歸せよ實乘の一善に、

宗教の撰擇に就て

石川 顯 隆

此頃或人が尋て來て申されますには、私の知人に日蓮宗の人がありまして信心も可なり致して居りましたが、如何なる因縁か十年來其家に殆んど病人の絶た事がありまして、親父が寝て居ると子が病つて居るとか、夫婦互に醫者に通つて居ると云有様でした、然るに近來或人の勧めに依つて天理教の信者になり熱心に信仰した結果一家悉く健康に成りました、

なく矛盾なかるべし、若し此宗教的見地を無視し局部の理論に走せ事畢れりとするが如きは恰も盲人の富士登山を企て頂上に達して尙四方を見る能はずと慨せしと一般、淺見も亦甚しと云ふべし

かくて日蓮上人は常に實乘の一善を以て第一義諦となし感化救済に意を注ぎ社會改善の策を計られたり嗚呼上人は先見の明に長じ給へる哉その模範的教訓は六百年後の今日に於て漸く讀者の間に稱へらるゝに至れりされど今日の所謂感化救済の事業を眞に効果あらしめんには先づ眞の宗教に依りて効力あることを知らざるべからず、眞の宗教とは何ぞ謂く所謂宗教道德の根本第一義たる絶對善を積極的に鼓吹すると共に、之に反する罪惡のすべてを斷滅し去らざるべからず、日蓮聖人の安國論に「彼の萬機を修せんより此一凶を禁ぜんに如かず」と固く謗法を禁ぜしは即ち是也

大學に「一家仁、一國興、一國義、一國與、一國強、一人貪戾、一國作亂、其禍如此」と曰ふに同じく、一人の善惡は必ず萬民に影響を及ぼすものなれば、日

全体これは如何なる譯でせう日蓮宗よりも却つて天理教の方が有難い宗教でせうかと申されました、此の問に對して私は次の答へを致しました、

元來宗教と云ふものはあなたの云はるゝ様な目前の僅かな事に依つて左右されべきものではありませんが、然るに世間の殆んど總ての人々があなたと同じ様な考へを以て宗教を觀察して居らるゝ事は甚だしく迷見と云はんければなりません、又非常に宗教を侮辱した考へである、斯かる人々には決して宗教の眞價は判りません、然らば宗教の大目的は如何なる點にあるかと申しますれば、宗教は吾人に世間の倫理道德以上の崇高にして妙味ある無上の道を教ゆるものであります、吾人々類は誠に正しき宗教の指導に依つて始めて闇黒を離れて光明に移る事が出来るのである、又天地法界の微妙なる眞實相の神聖なる宗教の指導に依つて始めて明了に信知する事が出来るのであります、實に宗教は一人己人を指導し一家を指導し一國を指導し全世界を指導開發して正しき道に就かしむる人生の依止處である法

界の無盡燈であります、吾人は一日もこの宗教を離るればそこに悲哀を感じ寂寥を感じ空虚を感ずる次第であります、斯かる意義に於ける宗教の信仰の尊い事は全世界に何物も比すべきものが無いのである、上人が「日蓮は閻浮第一の富者なり」と仰せられたのはこの信仰を懐抱し玉ふ故であります、然るに病氣がなるとか、なをらんとか、金が儲かるとか儲からんとか、死ぬとか生きるとか云ふ位な事は尤も問題にならない、そんな事は實は宗教以外の人事上の問題である、病氣になつたら醫者にお預んなさい、金がほしければ正直にお働らなさい、生死と云ふ様な事は運命にお任せなさい、宗教はそれ以上の尊い事を吾人に訓誡するものであります、極めて實際的であつた孔夫子でさへも「朝に道を聞て夕に死すとも可也」と仰せられて死生以上に道の尊重すべき所以を示されて居る殊に日蓮宗の人々は上人が開目抄に「詮するところは天もすて給へ諸賢にもあえ身命を期とせん、身子が六十劫の菩薩の行を退せし乞眼の婆羅門の責を堪えざる故、久遠大通

宗教を取捨するには利益如何と云ふ事に着眼してはならない、この教へは正しき教であるか邪しき教であるか、又深き教であるか浅き教であるかと云ふ點に充分注意する事が最も所要であると申しましたら、其人は大層喜んで歸られました。

聖祖鑽仰の資料に題す

高田 日暢

好學と精力の絶倫なる晝夜研究二十年諸學の蘊奥を極め、猶數々藏經を周閲して各宗の權實邪正を明瞭したる者は誰ぞ。

姿貌圓滿意氣蓋世如來使を以て任じ旭日曠々の宗教を建て、明快の智辯を振て道路に法を説きし者は誰ぞ。

宗教統一政教調和を企圖し立正安國論を建白して侃諤の主張、鎌倉府の上下萬衆を聳動したる者は誰ぞ。

不世出の聖人破天荒の神壽、恆に身輕法重死身弘法を標榜して百難に遭逢するも屈せず、畢世卅年獻身奮闘

の者の三五の塵をふる惡智識に値ふ故なり、善につけ惡につけ法華經をすつるは地獄の業なるべしと仰せられた聖語を深く思はんければなりません、このお言葉に依れば諸天の加護があるとかないとか、又目前の安穩であるとかないとか云ふ様な事は決して上人の眼中に重きをなして居らない、只だ法華經は佛陀の最上の聖教にして吾人々類の總てが依憑すべき大宗教であるとか云ふ點になるのであります、故にたとへ如何なる難が來たらふが身は八の裂にされやうが此の大法を捨てゝはならないと云ふ大決心を枝瀝された次第であります、吾人はこの上人の聖語に依つて宗教は如何なるものであるかと云ふ眞意義を知り又宗教の正邪を撰擇する標準とせんければならない、只だ病氣が平愈したとか、金が儲かつたとか云ふ位な僅かな賤しき事を目安に置いて宗教を左右せんとするが如きは取るに足らない淺見者流である、最も人は正しき教に依れば其の結果として自然に現世は安穩になり後世は大善地と成ずることは疑ひのない事でありますが、苟くも我等がせららたる者は誰ぞ。

これ則ち佛識を身讀して靈界最勝の光明と爲り、遠く萬世を照し給ふ我祖日蓮聖人にあらずや。而して聖人に對する古人の褒貶は終に決せず今人の嚮背も尙定まらず、正に日本歴史上の最大疑問物として七百年の宿題と爲れり。然れば文運思索の盛なる照代に至て講演に文書に聖人を議する者甚だ多し。就中博士高山樗牛氏が聖人論は局外より善く聖徳を付度し實歴を明示して殆ど遺憾なきに近し、其明論快筆は人をして耽讀措く能はざらしめ、自ら聖人の主義と人格を了解せしむるに足る。爲に宗徒歡喜し教敵怨嫉し局外者の覺醒甚だしく、延て世道人心を裨益せしこと鮮少ならず、乃ち近時類發せる聖人論の上乗なるものとして敬虔なる研究者の好指導と稱すべし。別言すれば現代の有ゆる文人學者を代表したる對日蓮の試験文とも見るべく、又七百年間の國民が漸く聖人研究の第一結果を公表せしものと傲すべし。嗚呼偉なる哉博士の文勳。吾人は感激の餘聖人の自傳的遺文と共に之を抄録して有志に

推奨す、莫くは至心に讀解して克く光前照後の聖哲に同化せよ。

今其嚮導とし模範として觀るべき事實あり。最澄空海の研究會も起す法然親鸞の研究會も興らざるに、獨り聖人鑽仰の嘉會が各地識者間に勃興するもの（姉崎博士高島先生等の天時會や東京辯護士中の妙典會及び京都岡山仙臺松山等の聖人研究會の如く）豈偶然の現象ならんや、これ則ち日本人が聖人に依て靈育的に一大覺覺を要する徴證にあらずして何ぞ。

然り而して御門下に聖人を論明したる良書は無き乎、曰く數多これ有と雖日蓮法華の名を聞てまづ嫌惡し、被閱せずして宗味を帯べりと忌憚する世人の傾向を奈何せん。是故に且く他の便宜を計り感興を惹んが爲に敢て門外の正論を提供し、以て聖人の心血を踐げる遺文に入り、直に聖人の眞面目に接觸せしめんと欲す。讀者之を諒せよ。

但惜むらくは博士の論目に元寇調伏は忘誕なりと斷じて聖蹟を異にするの一段あることをこれ吾宗徒の默認

時は幸ひにさしたる危険なかりしに近頃新教主セルキイ氏の渡來と共に暗濛たる烏雲驟臺を開して今や恐るべき一大禍根は正に彼の大殿堂内に植えられむとしつゝあり

▲露國教と希臘教 問題は露國正教と希臘正教兩者制度の相違より始まる希臘正教の宗制は僧侶は信者の公選にして一面牧師傳導師たると共に一面各信者の代表士たり露國正教會の制度は僧侶は悉く官選にして專制を以て部下を率ゐる專制を以て信者に望む駿河臺ニコライ師治下の教會は全く此露國式正教にして希臘正教の制度に非ず即ち僧侶は皆露國宗務省よりの官選にて教主は宛ら一個專制の大君主也全く不可抗也不可侵也禍根は茲に存す

▲露國信徒の反抗軍 此教主專制の弊害は露國正教の本國たる露國に於ても既に盛んに唱導せられて有名なトルストイ伯の如き實は此反抗軍の急先鋒たり彼等の希望する所は即ち元來の希臘正教に返すにあり僧侶の官選主教の專制を改革して公選代議制となすにあり

すべからざる處。吾人は論じて。嘗て本誌に掲げしことあり。今併録して參考に供す。

（已上は予が編輯したる『日蓮上人の實歴』に記したる序文の主要なるが故らに茲に載録して有志に示すもの也）

雜纂

宗教と國家との關係、宗教が國家に及ぼす利害、これ等を講究するは、既に讀者の認知する所ならん、國家論世界主義世界論國家主義、これ等に對する時代の批評に如何、吾人統一主義を天下に呼神する者の、須からず富強一番、指導の光明を一日も早く、實現せざるべからず、而して近時新聞紙上宗教に關する、批評尙來形を撰録する運に向ひたるは、海に悦ぶべき傾向といはざるべからず、一二參考のために讀者に紹介することになしぬ

基督正教會は如何に

神田駿河臺に天を摩しつゝあるニコライ堂は嘗て日露戰爭當時一度嫌の眼を以て環視されしとありしが當

處敗せる露國教は唯此法に因てのみ救はるべしとは彼等一般の主張也日本に於ける露國教信者内に此反抗軍の起りしは極めて最近の事なれども其今日に至る迄反抗軍の起らざりしは一にニコライ大教主が久しく熱誠獻心の徳に信者の心服し居りし結果にして弊害は毫も露本國と異らず

▲淨財の浪費 見よ駿臺の彼大殿堂は時價として正に數萬の富ならずや此頃は又更に大阪に三萬圓の巨資を投じて二大會堂建設の企畫あり同じ駿臺に堂々輪煥の美を極むる神學校は年々一萬餘圓を投じて傳導者の養成に力むれども最近五年間の卒業生留まる者目下僅に五人一人の養成費は實に一萬餘圓に當れり加之主教等は露國に於ける主教等と同じく服裝容儀頗る意を用ひて錦繡の衣黄金の十字架眞に堂々たる者なりされど此の如きは唯儀表のみ虚飾のみ翻つて基督教本來の博愛慈悲の旨に叶ふべき孤兒院慈善病院其他あらゆる慈善的爲の類何處に施したる跡ありやと問はゞ蓋し何人も全く陸然たらざるを得ざるべし神に捧げし淨財を以

て神の旨をば行はず徒らに儀表を飾るの事のみを費す
 惜みても尙餘りあらずや露本國には僧侶が錦衣二頭馬
 車に乗じて堂々布教に馳する背後に一村の民は食ふに
 物なく遂に一村を擧つて乞食に出づる悲惨事あり我邦
 在留の主教等にも都下幾個所の貧民窟を一瞥せしめざ
 るを遺憾とす

▲日本信徒反抗軍 偶昨年セルギー新主教の渡來ある
 年齒正に三十二歳青年氣鋭 身を以て腐敗せる露國正
 教最新の傷其儘を齎らし來りて之を我國に裁きむとせ
 り兼ねて弊害を認めつゝありし我信者今迄温厚なるニ
 コライ大主教に對して敢て忍びつゝありし信者の反抗
 熱は是より漸くにして勃發し始めて本年一月の東京府
 下信徒大會に口火を點じて七月開會の全國信徒大會に
 ては將に大々的に花々しき一大改革を遂行せむとはな
 したりしなり

▲日本信徒側の主張 是等信者側の主張に據れば目今
 の制度を保存し置けば若し一野心ある主教來りて其獨
 裁權と黄金の力とを利用して例へば賣國奴の類を牧師

又才略拔群前途頗る多望なりと云はるゝ新來の主教セ
 ルギー師も共に此至理なる信徒の要求に頑として應ぜ
 ざる事恰も本國露西亞に於ける主教等と簡ぶ所なく目
 下交渉行儀み中と聞くに至つては頗る遺憾に堪へざる
 也信徒諸氏の意向は既に牢乎として抜くべからず主教
 等にして飽迄も其主張を枉げすば實に氣の毒に堪へざ
 れども國家には換へ難し涙を飲んで飽迄も肉迫素志を
 貫徹せざれば止まざらむとする形勢なり見來ればこの
 解決如何は獨り一正教會の興廢問題たるのみならず實
 に國民全体の注視に値すべき緊急問題たらむとす

○基督教の教義

曰く、宇宙外に創造神あり、其名はエホバと呼ばれ、
 無より有を生ぜずとの論理以上に超越し、材料なしに
 宇宙を作れり。去れど、忽ち無は有を生ぜすと思ひ直
 し、塵にて男を作り、男の肋にて女を作り、此男女が
 惡魔に誘惑さるゝや、エドンの花園より彼等を放逐し
 たり。既にして人類漸く墮落したる千五百年、神の堪
 忍袋は茲に破れ、一切を溺殺して唯八人の善良人を殘

傳導等に採用して萬一日露に事あらむ時盛んに之を利
 用せば此堂々たるニコライ堂は全く露探の巢窟となり
 てニコライ師乃至セルギー師が孜孜如何に軼身的布教
 に力むるとも功は一朝にして水泡に歸すべく名譽あり
 歴史ある日本ハリストス正教會は一舉萬世雪ぐ可から
 ざる汚名の下に全滅されむ事鏡に懸けて見るが如し今
 にして此制度を改め僧侶を總べて信者の公選とする事
 は一は以て教會の此危險を未然に除く事を得べく一は
 又露國教に對する世人の誤解を解くが故に教會を通じ
 て愈々益日露將來の親和を圖るに好便宜を得べし眞に
 是れ一舉兩得の策ならずやと云ふにあり教會が大部分
 露國の金を以て維持され僧侶は凡べて其金に活きて爾
 も其活殺與奪の全權は擧げて皆露人たる一主教の不可
 侵的特權に屬すとせば熱烈なる愛國心に燃えつゝある
 我邦三萬の同教信徒が斯の如き主張もて堂々反旗を翻
 し來りしは實に當代の慶事と云ふべし

▲主教等の頑強 然るに四十八年來此島帝國に永住し
 て渾身聖教の權化と仰がれつゝある老ニコライ師も尙

さる此八人の後裔中、アブラハム及其子孫は特に神よ
 り選び出され、選民の特遇を受け、神は法度を彼等に
 授け、多くの奇蹟を示して聖書を其徒モセスに著さし
 めり。去れど人類の改善は此位の事にて出來ざればと
 て流石に多能多藝の神も遂に人に許嫁せる女子の腹を
 借つて人間に來り、三年間死者を回生せしめ、或は盲
 目を明目たらしめ、或は癩を清めつゝ教を説きしに、
 自分が昔以來特寵せる選民に瀆神罪と看誤せられ「嗚
 呼天の父よ何故吾を見捨てるぞ!」と悲みつゝ磔刑に
 處せられたり。然ども實を申せば磔刑されたるに非ず
 して即ち彼を信せる者其の罪に代りたるなり。彼は磔
 殺されしも數日後に蘇生し昇天し、爾來天に在て信徒
 の爲に周旋執掌甚だ御多忙に在らせらる。彼を信する
 者は慶福此上なく、信ぜざれば死後永劫地獄に落つる
 と疑なし。是故に「心だに誠の道に叶ひなば祈らずと
 ても神や守らん」などゝ日本風に正直に盡すと雖も、
 口にて祈らざる時は心の誠も其効なく、永劫地獄に落
 ち行かん。去れど一度「吾信ず」と申し立て基督の執事

と稱せる牧師の手にて頭に水を撒り掛けられれば、忽ち地獄を免かれ極樂往生を遂られ得ん、今の基督教徒は昔日の其れとは異なれりと自慢すれども、彼等が洗禮を行ふに方り、此基督教徒を信するや否やを受禮者に問ふを常とす。或は寛大を装ひ、此等教義の信否を不問に附して信徒の數を加ふるを方便とするなきに非ず。去れど信徒の數に入つたる以上は、忽ち籠中の鳥と一般、從來の傳說的教義の楛楛は其人の一進一止に經はるを以て遂に斯かる基督教を評してアルシナの宮殿と名くる者あり。开は門構への立派なると建築物の宏大なるが如く見ゆるのみならず、人をして此殿中に寝食するの樂幾許なるべきやを妄想せしむるに足る者あれば、何人も飛んで火に入る蟲の如く、好んで自から我身を械繫するの結果を經驗せざる者なしとの喩也

所謂三位一體

曰く、三位一體、是基督教の諸々が異口同音に主張する所のもの、即ち之を基督教に入る第一門と稱するも不可なきなり、曰く神、曰く神の子、曰く聖靈、此三

者は三にして一、一にして三なりと主張するを、佛教坊主が修證不二とか、或に水波無二とか、王陽明等が知行合一と主張すると形式を同ふす然れども佛教や陽明等が無二或は合一と稱するは研究の價值もあり、研究すればする程、趣味の津々たるを覺ゆれども、所謂三位一體に至つては何の事やら相分らず。請ふ其歴史を物語り以て吾言の妄ならざる所以の一端を示さん。基督教の大味方たる羅馬皇帝マンスタンチンは、其皇后及皇太子を虐殺せし年を以て、ニラに會議を召集し、集りたる僧侶に耶蘇基督の人間なるか將た神なるかを討論せしめしも要領を得ざりき。今の基督教徒は基督を神と呼ぶも最初の基督教は斯の如き者なりしとを考ふれば基督教が如何に發達せしか思ひ半に過ぐる者あらん。此問題は紀元三二五年始めて決定し、基督教社界一般に耶蘇は神なりと定まりたり。由是觀之基督教と耶蘇其人とは全く別物なるを見る可し。即ち基督教は耶蘇の死後三百年間に作成され、而も僅かに彼を神なりと決定するまでに運びたるのみ、當時まで

耶蘇は一個の人物と見做されしものが、是に至つて始めて人非人に成り上りたるか或は成り下がりにしなり。其の上り下りは論ずるに及ばず、兎に角彼れ人非人其後紀元三八一年セワドシヤス帝はコンスタンチノブル會議を開き、僧侶をして「聖靈は天父より進むものなり」と議決せしめ、茲に始て今の所謂三位一體の内を二位一體まで進めたり。聖靈は天父より進むとは何の意味か、彼の意味かは不分明なれども、當時以後は此事を信する基督教徒に必要條件に成されり、去れど今日の三位一體は猶ほ夢想だもされざりしなり。而して又耶蘇の母は處女のマリアなりと議決されしも同帝治世時代の事とす。

紀元四三一年、四五一年、マシヤン帝のチャルメドン會議にて、耶蘇は神人の兩性を有するを議定されき然らば、紀元三二五年、彼を神と決定せしも、猶ほ此頃までは曖昧なりしや明かなり。

紀元六八〇年コンスタンチノブル會議が始て聖靈は天父及子より進むとの不可解なる議案を討議せしも、

其れが愈々確定議と成りしは、一二七四年リヨン會議なりしなり。即紀元十三世紀に至り、所謂三位一體を信する事が基督教徒死後昇天の必要條件と爲りし事はに由て見る可きに非ず乎。故に吾人は曰ふ、三位一體果して死後昇天の必要條件なりとせば、十三世紀前の基督教徒は死後昇天の資格なき者なり。而して此三位一體も、二位一體も、基督の神か否かも、一切羅馬皇帝が召集せし僧侶會議の結果なりとせば、基督教徒の極樂行は彼等皇帝僧侶に議決されたる滑稽のものなりとす。然るに二十世紀の今日我東京の眞ん中にて麗々しくも三位一體などをコジ付け牽き附け、羅馬僧侶の精粕を重寶がらんと試むる基督教徒あるも咄々怪事と謂ふ可き歟或は曰く、是れ羅馬僧侶の滑稽が生みたる滑稽にて處女の生みたる耶蘇に相應せるものとや謂はん。

報 道

顯本協會の活動

○九月十二日淺草常林寺に於て開會

宗教の要義
正義と偉人
法華經中心の要旨
偉人の言に聞け

高山俊貞師
中原進隆師
笹川眞應師
山根日東師

○九月十二日品川妙國寺に於て開會

開目抄の眞髓
宗教獲得の標準
龍口法難に就て

龍井本光師
石川顯隆師
本多日生上人

○九月十九日谷中本授寺に於て開會

信仰と道徳
聖日蓮の主義

石川顯隆師
關田養叔師

○九月二十七日品川本光寺に於て開會

到彼岸の意義
君子は道に謀て食を謀らざ
佛壽長遠

今成乾隨師
石川顯隆師
笹川眞應師

に野口僧正をはるく訪問致され候、時は八月二十六日正午なりき、然るに予は野口僧正に少しの用事ありて座談中、茲に初めて僧正の紹介に依りて親交を結ぶに至り、先生の來總を幸機として無端くも本納町に日蓮主義の演説を公開するとに相成候、开は同月二十一日の夜なりき、而して當夜は舊七月十六日にして未だ盆會中となれば夕刻より聽衆陸續と翹集致し、定刻には既に満堂立錫の餘地もなき程に有之候、余は開會の辭にして今回兩氏を聘して開催せる理由を述べ、夫に因て話頭一轉、吾人は宗教的生活によらざるべからず、而して宗教的生活は僧侶や寺院や教會の専有物にあらざるとを説き、五箇の要素を擧て人類生活の根本なりと下手の長談義を致し候、次に野口日主僧正は妹尾先生を紹介せんとして「宗教は歌にありてよ題下にて、佛教の先師先哲が弘教の爲如何に、苦辛盡策せられしかを説き、更に進んで歴史上より歌謠類の變遷を論じ、現今世俗一般が聲調に心をよせず、經文題目の如き、實に急調卒讀にして無味乾燥なることを誠め

人生の終歸

山根日東師

以上は九月中に於ける本會の活動である、殊に注意すべきは、品川に年來實行せる信徒の研究會である、近來新加入もあり、參會者非常に増加し何れも敬虔の實を現はしたるは、悦ぶべき現象といはざるべからず、○天晴會の講演録、今回該書出版に就て、豫約を募集せられたるが非常の好成績にて如何に世人が正法を渴仰せるかを卜知するに足る、殊に本書は營利的事業にあらずして、精神的に正法弘布の爲に竭す事なれば價格の低廉なる、況んやその内容の豊富なる苟も心靈修養の志を持てる人士は、是非に本書を播讀せずして可ならんや

上總だより

統一記者笠堂君足下予は久しく御無音に打過ぎ申候處初秋の候、足下を初め編輯局各位筆硯倍々御多勝の段慶賀斯事に存候、

扱て淺間山下の草庵より頃日の教況一寸御報可申上候今回未見の友、妹尾凌雲先生京都より大綱町蓮照精舎

而して龍樹菩薩弘教の例を引證して、大に讚頌的思想を鼓吹し、殊に僧正が平易簡明にして趣味に富る語調は一層の感興と法悦とを興え申候、次に妹尾凌雲先生は「松守彌三郎」日蓮上人傳中即ち氏が新曲になれる統一節を演じ候、然るに其詞は或は低くして沈痛に或は昂くして豪容に、能く聖人の偉大なる人格を遺憾なく躍動せしめ「心はニツ身一ツ」の一句に至りては満堂寂として聲なく、恰も水を打たるが如く、感嘆の聲は少時は鳴りも止まざりき、而して聽衆より今一席との懇望ありしも今後を約して十一時無事閉會致し候、尙一行は、同町蓮福寺に一泊、先づ野口僧正より座談の火蓋は切放たれ、夫より各自獨特の妙論珍談、即ち伊藤師の「あかりかん」論、白鳥君の「演説評論 人物評論」果ては妹尾先生の「民間評論新聞」となり雞鳴既にして終りを告げ、各自數屋裡の人と相成候、同夜席上即吟一首ありたれば足下の一餐に供し候草々

妹尾先生始見賦呈

相値談論如舊知。寸毫無蔽又無支。東西救海草事、不
識百年咎刻移。

般舟生

千葉縣東金町佛教講話會

毎月舊十二日東金町嘉方妙福寺に於て錦織大僧正の祖
書講話森川寛行師の經典講話并に三上義徹師、横山會
章師、金坂乾受師等演説し來りしが漸次參聽者増加し
去る舊九月十二日の如きは聽衆二百五十餘名にして三
上師は日蓮聖人の人格森川師は人生の意義に就て熱誠
なる講演に次ぎ餘興には薩摩琵琶ありて散會したり、

●救恤幻燈會 大阪の大火江濃の震災は近代未曾有の
慘事なるは云ふ迄もなき事實なるが該被害の慘狀に同
情し千葉縣濱野本行寺中村師は大阪江濃兩地の災害實
況幻燈畫を購入し去月二十九日同寺に冊日生實本滿寺
に該幻燈會を開會したり當日は兩寺共施餓鬼會の夜な
りしを以て會者七百餘名の大盛會に中村竹内兩師の熱
烈なる同情の説明は多大の感慨同情心を興起せしめ即
時義金を寄する者多く直に若干圓を得りしかば同師は

其の事實を畧記し同村長に被害人民に送附方を依頼せ
る由なり

●縣下聯合布教師 會例會本月八日同例會を長生郡新
治村万光寺に開會同村重立及區長議員等來會聽者百餘
名盛會なりし寺院としては朽木委員長齋藤管事倉上角
田各住職を見たり演題及講師左に

福音奧音の由來

誰か知れ自身ノ眞價

信 得

修業に就て

宗教の必要

理想の生活

信仰に付て

佛陀の相待的救濟

森川 會 殿

金坂 教 隆

渡邊 乾 航

成島 泰 行

廣部 乾 山

小澤 盛 重

森川 寛 行

中村 乾 信

同夜救恤幻燈會開會、四隣町村より來り一時は八百を
算する大盛會にて中村森川成島小澤倉上各師の説明あ
り寄金に付ては伊藤僧都に一任し閉會せり
京都天晴會第三回例會 去る九月八日午後三時より總
本山妙滿寺に於て開催 講師としては東京より熊々入

洛せられたる、東京天晴會員海軍大佐子爵小笠原長生
氏にして、日蓮上人の國家觀てふ題下に約一時間余に
亘りて講演せられたり、其豊富なる材料、明確の論熱
烈なる態度、流暢の辯一同の満足此の上なし、次に會
員從五位金子彌平氏の日蓮聖人の人格に就ての感想談
ありて六時より精進料理の晩餐會催せり、當日は野口
日主、幸田露伴、横堀工學博士等會員の欠席者比較的
多かりしも新會員本妙法華宗管長法谷師を始め來賓に
は兼田愛宕部長、東野大阪毎日記者、和田中外記者、
妙滿寺信徒重立、岡山より久城茂太郎氏等四十名に近
かゝりし。

因に一同は萩の亂れ咲きつる妙滿寺の庭に記念撮影
せり

小笠原子爵の入洛 天晴會出席の爲め七日午後七時
半七條驛に着、本山より鈴木川崎、山岸幹事金子彌平
中村寛澄氏等の出迎を受けられ妙滿寺に御一泊翌九日
午前、村雲尼公殿下に伺候せられ、寂光寺に開祖の諷
語章等の寶物を拜觀し清水なる田中甚平氏の別荘に茶

の饗を受けられ、午後天晴會に出席信仰談揮毫等に祝
は更けて、虫聲しげき本山の一室に再びの宿せられて
十日午前九時廿五分の列車にて歸東田上貫主、本山一
統、山岸幹事見送りたり、

會津妙法寺本堂再建寄附金申込廣告(第五回)

金三十圓也	第八教區妙德寺住職	白井	日昇	金三圓五十錢	第一回四二ノ二ノ三	吉田	日宜
金三十圓也	同	西福寺住職	山岡	會俊	第一回四二ノ二ノ三〇〇	田島	義潤
金二十五圓也	同	本漸寺住職	森川	寛行	第二回四二ノ二ノ三〇〇	笠原	琢堂
金二十圓也	同	元福寺住職	齋藤	海叔	第三回四二ノ二ノ三〇〇	山崎	日輝
金七圓二十錢	同	妙福寺住職	錦織	日航	第四回四二ノ二ノ三〇〇	大須賀	玄遊
金三圓也	同	淨圓房爰務	同	人	第五回四二ノ二ノ三〇〇	松本	日新
金三十圓也	同	本松寺住職	橫溝	日藥	第六回四二ノ二ノ三〇〇	森本	眞良
金壹百圓也	第九教區藥王寺住職	中田	日蓮	全	第七回四二ノ二ノ三〇〇	田井	日晃
金二十五圓也	同	經胤寺住職	綿貫	善院	第八回四二ノ二ノ三〇〇	大根田	瑞海
金十八圓六十錢	同	本城寺住職	日暮	玄榮	第九回四二ノ二ノ三〇〇	小金井	明鐘
金十五圓也	同	寶泉寺住職	夏目	智誓	第十回四二ノ二ノ三〇〇	山根	日東
金十圓也	同	永福寺住職	海老澤	乾樹	第十一回四二ノ二ノ三〇〇	川崎	泰秀
金五圓五十錢	同	要行寺住職	鈴木	智政	第十二回四二ノ二ノ三〇〇	關田	泰叔
金四圓也	同	觀光寺住職	萩原	宗賢	第十三回四二ノ二ノ三〇〇	萩原	啓門
金十圓六十錢	同	新藏寺住職	因幡	善英	第十四回四二ノ二ノ三〇〇	安藤	日莊
金三圓也	同	光明寺住職	加藤	關照	第十五回四二ノ二ノ三〇〇	井村	日成
金十二圓也	同	東光寺住職	井上	容受	第十六回四二ノ二ノ三〇〇	今成	乾隨
金十六圓也	同	正福寺住職	林	孝	第十七回四二ノ二ノ三〇〇	伊保	内教精
金一圓也	同	大經寺住職	寺田	善海	第十八回四二ノ二ノ三〇〇	今成	乾隨
會津妙法寺本堂再建寄附金領取廣告(第一回)	第一回	四二ノ二ノ一五	錦織	日航	第十九回四二ノ二ノ三〇〇	飯倉	日和
金八圓六十錢	同	同	野口	日主	第二十回四二ノ二ノ三〇〇	吉田	義若
金一圓五十錢	同	同	同	同	第二十一回四二ノ二ノ三〇〇	同	同
金十五圓也	同	同	同	同	第二十二回四二ノ二ノ三〇〇	同	同

大阪大火義捐金 (第一回)

一金四拾壹圓也

内譯

顯本法華宗

岡山婦人會并ニ有志

野上八重子	野上	八重子	野上	八重子	野上	八重子	野上	八重子
久城	コノ	須山	シモ	三宅	ヤス	三田	ハツ	ハツ
宇垣	ナカ	須山	シモ	三宅	ヤス	三田	ハツ	ハツ
市瀬	イヤ	渡邊	小菊	三田	ハツ	ハツ	ハツ	ハツ
久城	シダ	天野	ミサ子	三田	ハツ	ハツ	ハツ	ハツ
大熊	スエ	土方	ミツ	江見	里よ	里よ	里よ	里よ
吉川	タキ	小松原	アサノ	高山	ツル	ツル	ツル	ツル
吉田	ユイ	原田	ミツ	磯井	久	久	久	久
横山	シダ	田中	あい	小林	カツ	カツ	カツ	カツ
田村	幸	田中	あい	小林	カツ	カツ	カツ	カツ
福田	豊	佐藤	コト	三澤	トキ	トキ	トキ	トキ
藤井	カツ	生田	コノ	内藤	シン	シン	シン	シン
鳥越	小松	齋藤	トシ	久城	キミ	キミ	キミ	キミ
神崎	駒	佐野	ハナ	高木	トク	トク	トク	トク
久城	トラ	田中	フテ	桐野	芳	芳	芳	芳
橋本	マヨ	田中	フテ	桐野	芳	芳	芳	芳
大野	小長	西谷	コチヨ	矢吹	カヨ	カヨ	カヨ	カヨ
荻野	八重	板野	イクノ	小倉	孝	孝	孝	孝
中藤	ミトヨ	板野	イクノ	小倉	孝	孝	孝	孝

金拾五錢宛	上田	千勢	増岡	春	貝原	民	民
金拾五錢宛	小笹	スガ	吉田	タキ	久城	梅	梅
金拾五錢宛	河手	シダ	今井	シダ	加藤	アキ	アキ
金拾五錢宛	片岡	トミ	鳥居	トワ	有松	クラ	クラ
金拾五錢宛	安井	マサ	福井	房	三好	キシ	キシ
金拾五錢宛	安原	ギン	鳥村	喜久野	高島	マス	マス
金拾五錢宛	長坂	ツマ	人見	ツユ	井上	養	養
金拾五錢宛	戸板	ヒサ	八名	峯	辻小	藤	藤
金拾五錢宛	難波	サト	山口	ハル	松田	スエ	スエ
金拾五錢宛	松橋	コナミ	菅	文	金光	キク	キク
金拾五錢宛	更井	ツル	金光	ユウ	平田	リカ	リカ
金拾五錢宛	岸本	イセ	山本	小仙	金澤	みよ	みよ
金拾五錢宛	有松	トク	山本	小仙	金澤	みよ	みよ
金拾五錢宛	野上	波	秋山	アキ	久城	音	音
金拾五錢宛	杉山	アサ	難波	ハズエ	久城	音	音
金拾五錢宛	河田	トク	難波	ハズエ	久城	音	音
金拾五錢宛	能仁	操	難波	ハズエ	久城	音	音
金拾五錢宛	岡山縣勝田郡飯岡村本經寺住職及檀家有志	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	岡山縣勝田郡飯岡村久成寺檀家有志	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	全赤磐郡周匝村白石村白石前橋中	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	全御津郡白石村白石前橋中	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	全白石郷橋中	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	全白石郷橋中	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	全板野程平外五名	全	全	全	全	全	全
金拾五錢宛	計金四拾壹圓也	全	全	全	全	全	全

大石養淳著

日蓮宗說教書全

四六版五號
活字紙數參百
頁近井桁橋紋
付表紙

附古人說教長篇遺稿

本書内容は彼岸、盆會、御法難會、會式、葬式、年回
通夜、臨時法話、工場、軍隊、監獄布教等に其儘用ゆ
べく、法門は勿論、譬喩、因縁、悲話、滑稽、等遺憾
なく擧げ、外に古人說教の長稿を載せれば、實に說
教界の寶典と云ふべし
代價當分の内金八拾錢、本社へ直接申込者に限り送料
當方に於て負擔即日發送す

發行所

北天教光社

北海道後志國古平港字濱仲町

發賣所

東京市京橋區疊町
須原屋書店

大阪市中心齋橋區安土町北

全

加賀善吉田書店

▼豫約募集延期▲

日蓮 鑽仰 天晴會講演錄 第壹輯

◎本書の體裁内容等の詳細は本誌前號を見よ
◎正價金一圓五拾錢、豫約金一圓 返送料金
十二錢

右は豫約申込期限を九月三十日限り締切るべきの處、
筆肥録の整正及び各講師が綿密鄭重なる校閲等の爲め
出版期日より多少相後れ候のみならず今猶陸續として
應募申込者あるを以て來る十一月十五日迄豫約期限を
延期候條希望者は此際至急申込するべし

發行所

東京市淺草區新谷町一四
天晴會事務所

誌 則

- 一 發行期日 毎月一回十五日
- 一 誌 料 一冊金六錢、十二冊前金六十五錢
- 一 廣告料 郵券代用は一割増、但五厘切手を可とす
一頁拾圓、半頁六圓、四分ノ一頁三圓
五十錢、特別廣告十五圓ヨリ二十五
圓マデ
- 一 購讀申込 住所氏名を楷書にて認められたし
一 代金拂込 振替貯金を使とす、拂込用紙は最寄
郵便局より受取られたし、但し此の
場合は誌料の外に金貳錢を振替口座
手数料として餘分に拂込ありたし

明治四十二年十月十五日印刷發行

發行所

統一團

東京府荏原郡品川町大字南品川宿四百十二番地
編輯人 井村日威
印刷人 山根日東
印刷所 鈴木日雄
印刷所 北澤活版所

●小賣部

同市三條
通大橋四入

三法堂佛具陳列場

宮殿・須味段・前
機・幢幡大販賣
位牌・木魚
佛具一切卸
諸宗佛肖
御肖
像畫專門
各宗寺院御入用品一
切



小包郵券附三法堂佛具發賣目錄正價付

注意
佛具と稱ふれども其種類數多有之候を以て一々記載する處は不
得に佛具一切正價附發賣目錄を製作致置候に付御入用の諸君
は郵券四錢御入用品一切の諸君御用程造方でも座ながら買物安料
寺院方御用程一切の諸君御用程造方でも座ながら買物安料
にて早くと取寄せ御覽あ、其正價附の品は左の如し

佛具部卸
京都市三條、本舖三法堂藤田總治
通小橋四入
持電話二千七百八十三番
振替貯金番號一東京二〇七一九

持電話二千七百八十三番
振替貯金番號一東京二〇七一九

統一

第七百七十七號

明治四十二年十一月十五日（每月一、四、七、十、十三、十六、十九、二十二、二十五、二十八、三十一）